

「小事に忠実な者」

2015年10月14日

ルカによる福音書 16章 10節～13節。「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

上記の御言葉は、先の「不正な管理人のたとえ」とは繋がっていないと思われる。別の資料から付け加えて書いたものであろう。ルカ福音書の著者は色々な資料から抜き出して、繋ぎ合わせて書いている。

まず「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である」と言う。C・H・ルイスの『悪魔の手紙』だったと思うが、次のようなことを書いていた。大悪魔が修行中の小悪魔に、世界を愛するとか壮大な愛を言うように導いた時は、悪魔として成功である。隣りの人を具体的に愛そうなどと思うようになったら、悪魔として失格だと教えていた。現下の小事に忠実を尽くすことが基本であろう。しかし逆に、重箱の隅をほじくするようなことばかりして、大事が見えないこともある。事柄をしっかりと見定め、的確に対応することは至難である。

次に「だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか」と語る。不正にまみれた富とはごまかして得た利益であろう。その富、利益に忠実であれとはどういうことであろうか。富の奴隷とならず、富を相対的なものと認識し、扱えということであろう。忠実でなければ、本当に価値あるものを任せられないという。岩波訳は「他人のもの」は自分のものにならない現世の財、「あなたがたのもの」は本来の天的財を示すと解釈している。そうならば、富に忠実であれば、価値ある真実（福音）を与えられ、任せられるという意味になる。忠実とは、そのものの意味と価値を以上にでも以下でもなく、そのまま受け止めることではないか。

そして最後に富に支配されている人に勧めている。「どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」マタイ福音書 6章 19節～21節に「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」と書かれている。地上に富を積まず、神のおられる天に富を積みと勧めている。人は何を富とするかによって、その人の品位が表れる。お金に振り回されて生きている現代人には、頭ではそうだと思いつつ、生活がついて行かないのが実情であろう。福音の豊かさを味わっているかどうかにかかっている。